

---

# 黒色精霊種(ダークエルフ)さんちの女の子

偽作家

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダークエルフ  
黒色精霊種さんちの女の子

### 【Nコード】

N3390Z

### 【作者名】

偽作家

### 【あらすじ】

エルフ 精霊数やリカント 霊獣種の成功者達が住まう、天に向かってそびえる都市群。

それらに半ば寄生するようにして、スラム 貧民街は存在する。

その一角に、不思議な看板を出した建物があることはあまり知られていない。

『万事、解決することがあります』

やる気があるのかないのか。

自信があるのかないのか。

この建物はいつの頃からか探偵社と呼ばれ、ここに住まうものは探偵と呼ばれるようになった。

これは、他種族が跋扈する神のいない世界での、探偵と少女の物語。

2011/12/11

昔某所に投稿していたファンタジー世界探偵ものを加筆修正して掲載していく予定です。

ご意見、ご感想をいただけましたら狂喜乱舞します。

拙い物語ですが、何卒よろしくお願いいたします。

## プロローグ

「先生、お願いします」

「お願いしなすと言われてもなあ」

アルフリート・ウルグルスは彼を頼みとすがるヒト種ヒューマンの老人に向かって苦笑すると、「子どもじゃないか」と言うしかなかった。

彼の目の前にいるのは確かに子どもだった。

それもヒト種ヒューマンと見られる脆弱な子だ。

年の頃なら六つか七つ。

栄養状態があまりよくないのか痩せていて、ボロキレ同然の着衣から伸びる手足は枯れ木のように細い。

珍しい真紅の髪もぱさぱさで、死界の草のようだ。

目ばかりがギラギラとこちらを睨んでいて、野生の獣を思わせた。

「子どもといって侮っちゃいけません。大の大人がもう何人もの

されてるんで さあ

「はあ」

小柄な童子にそんなことが出来るものなのか。

これが戦うために生まれてきたよう な、屈強な鬼人族ホルン

の子どもならば別であるが。

だが、食糧を食い荒らされたという貧民街スラム

の長老の言葉を捨て置けない。

ここで隠居する以上アルフリートもまた、この地の食料事情に

影響を受ける身だ。

もつとも。

欠食児童一人の食事量など 高が知れているだろうが。

「ま、いいだろう」

言いながらアルフリートは己の肩を掴み、こきこきと鳴らして見せた。

このところの運動不足の解消になればと、この依頼とも言えぬ依頼を受けることにしたのだ。

貧民街スラムに身を置くのが道楽なら貧民達の依頼を受けるのも道楽。  
アルフリートはその気になれば誰とも関わらなくとも生きていけるほどの資産を持つてはいるが、それでは生きているのがあまりにも寂しすぎる。

「長生きも考えものだ」

そう言いながら、アルフリートは童子に向き直った。

まるで猛獣のように牙をむき出しにして威嚇する童子。  
アルフリートが野暮ったいローブの袖を捲くると、黒色精霊種ダークエルフの特徴である褐色の、しかし美しい肌が晒される。

女なら思わず抱きついて口付けたくなるほどの美貌を笑みの形に曲げながら、永遠の美を持つ という男は童子に向かって言い放った。

「かかっておいで」

どこかからかいを含んだ男の言葉を理解したのかどうか。

童子はガラクタだらけの地面を蹴ってまっすぐにアルフリートに向かって駆けて来る。

「ほう！」

その速度に、アルフリートは感嘆の声を漏らした。

およそヒト種ヒューマンならば成人した戦士であってもこれほどの速度で動けるかどうか。

そんな速度で、年端もいかぬ子どもが駆けるとは。

あっという間に距離が縮まり、童子がアルフリートに肉薄する。

低い姿勢で拳を構え、アルフリートを殴りつけようとふりかぶる。

「そうはいかん」

しかしそこは身体能力でヒトを大きく上回る黒色精霊種ダークエルフのアルフリート。

流麗な動きで身を屈めると、すばい動きでさっと童子の足を払ってしまう。

「それでも子ども。動きが単調だ」

アルフリートが余裕の表情でそう言った瞬間、貧民街スラムの長老が警告するように叫んだ。

「先生！まだだ！」

「何？」

足を払われ体勢を崩したはずの童子は、なんとその細腕一本を地面についただけでその体を支え、あまつさえ腕一本のバネでアルフリートのほうへ飛びついてきた。

「なんと!？」

驚愕するアルフリート。

その肩に跨った童子は銀の髪を乱暴に掴み、右腕を振り上げてあらゆる芸術よりも尚美しいと称される黒色精霊種ダークエルフの顔面に叩きつけようと振り下ろす。

「汝、その身を竦ませよ(エル・ダラリ)」

長老が思わず目を瞑った瞬間。

アルフリートが短く呪言ルンを呟いた。  
生命がその身に生まれながらもつ力「エーテル靈力」。

エルフ精霊種はその扱いに長けた種族だ。

拳を振り上げたままその体をびくりと震わせた姿勢で動きを止めた童子を、アルフリートはむんずと掴んで引き剥がした。

「ふう、確かにとんでもない子どもだ」

術が解けた童子がじたばたと足掻くが、そこは文字通り大人と子どもの身長差。どうすることも出来ずに、童子は痲癢を起こす。

「この変態! 離せ、くそ野郎!」

「ん? お前、話せるのか? しかもその声、女か?」

口汚い言葉で罵る童子を観察しながら、ふむとその素晴らしく整

った己の顎に手を伸ばすアルフリート。

「いいから離せ！この、イ○ポ野郎！」

「しかし、聞くに耐えんな」

アルフリートはそう言うのと顎に添えていた方の指先をすつつと童子の眉間の辺りに宛がい、今にもその指に噛み付きそうな童子に向かつて短く呪言した。

「汝、心を閉じよ（エル・シタリ・エラ・ヤータ）」

アルフリートがそう呟くと童子はふいに暴れるのを止め、すつつと目を細めてぐったりとする。

「こ、殺したんで？」

心配そうに駆け寄ってくる長老に、アルフリートは苦笑しながら首を横に振った。

「まさか。眠っているだけだ。子どもを殺す趣味は私にはない  
よ」

なるほどよく見れば童子は寝息を立て、その薄い胸がかすかに上  
下している。

長老はほつとしながらアルフリートに向き直った。

「これで食べ物を食べ荒らされる心配もなくなりました。先生に  
はいつもお世話になってて申し訳ねえ。出来るだけのお礼は……」

「いやいやお礼はいいよ。所詮は暇つぶしだ。それよりこの女子おなこ  
を私に譲ってくれないか」



「は？」

「聞いてみると中央の方の綺麗な標準語を喋るし、身体能力はヒト種の規格ではない。何故 こんなヒトが存在するのか興味がある」

「はあ」

「道楽だ。捨て置けよ」

アルフリートはそう言っ て、得心がいかぬままの長老を放ったまま、眠る童子を担いで自分の住処へと帰っていった。

だがこの時アルフリートは長老が納得いくまで こんこんと語って聞かせるべきだったのかもしれない。

翌日の貧民街ではアルフリートが幼児嗜好者であるとい う噂が、まことしやかに広まっていたのだから。

## 十年後

そんな昔のことをまど ろみの中で夢に見た後、アルフリートは安楽椅子の上で目を覚ました。

いつの間に眠っていたのか。

キセルでくすぶる煙草の火を慌てて消すアルフリート。

寝煙草していたことがばれると同居人に怒られてしまう。

隣室で は何かがつくつと沸騰する微かな音がする。

黒色精霊種の優れた聴力に頼らずとも良いほどに、この粗末な家は壁が薄い。

鼻腔をよい香りがくすぐる。

夕食にありつけるのはそう遠いことではないらしい。

「ルカ。今日の食事はなんだ？」

アルフリートが寝起きであることを悟られぬように声を整えてから隣室に声を掛けると、「兎肉と春キャベツのシチュー」というぶつきらぼうな返事が返ってきた。

その声にはやや棘がある。

料理好きの彼女は、食事の準備を邪魔されるとひどく怒るのだ。

「それは楽しみだ」

アルフリートがそう呟くと、きいっと扉が開いて一人の少女が室内に入ってくる。

真紅の髪をした美しい少女である。

年の頃は十五、六。恐ろしく丈の短いパンツに、胸元や臍を見せ付けるように露出したタンクトップという軽装ではあるが、不思議と卑猥な感じはしない。

幼さの残る、年相応のみずみずしさがあるだけだ。

単に体型に起伏がないからだという者もあるかもしれないが。

「イライの実、入れてもいい？」

「いいよ」

アルフリートがそう答えると、少女は台所に戻っていく。

ダークエルフ黒色精霊種のアルフリートが舌を巻くほどの身体能力を持ち、希少な赤い髪をした不可思議な少女。

彼が貧民街スラムで拾いルカと名づけた、その少女が成長した姿であった。

「あと、寝煙草は駄目だからね！」

すっかりばれていたらしい。

案外ずぼらな保護者の性格から存外にしっかり者に成長した少女のことを思い、アルフリートは小さく苦笑した。

その姿はだが、とても嬉しそうに見えた。

## 事件1 かくれんぼ（ハイド・アンド・シーク）？

薄暗い路地。

月の輝く満月の晩。

懸命に地面を蹴って、追跡から逃れようとする男がいた。

「はっ、はっ、はっ」

長身でがっしりとした上半身を持つ、鍛え上げられた身体。一目で<sup>リカント</sup>霊獣種と分かる特徴的なねこ科の獣のような耳。

<sup>リカント</sup>霊獣種はその身体能力において<sup>ホルン</sup>鬼族と並ぶ種族であり、戦闘においては圧倒的な実力を示す。

軍部においても<sup>リカント</sup>霊獣種が占める割合は無視できぬものがあり（もちろん繁殖力の強いヒト種<sup>ヒューマン</sup>がもっとも大きな割合を占めるが）、<sup>リカント</sup>軍人種族の別名を持つほどだ。

その<sup>リカント</sup>霊獣種の、若く逞しい固体が今、追いつがる追跡者から必死に逃げていた。

見ればその身体は傷だらけ。

背中に負った大きな爪痕からだらだらと血を流し、身体のいたるところに打撲や擦過傷が見て取れる。

であればこの<sup>リカント</sup>霊獣種、敗北してそして逃げているのだ。

男は名をケントと言う。

彼自身は学生であるが、父は著名な軍人で、彼自身も将来は軍部に所属することを希望していた。

地面を蹴るケントは、しかしもう気付き始めてもいたのだ。

自分の人生が今日ここで終わるかもしれないことに。

（だが、だがこのままでは）

ケントは考える。

走りながらも考える。

（アリサに、アリサに誰が伝えてくれる？誰がアリサを助けてやる？俺がここで死んだら、誰が…）

こんな目に遭いながら、それでも誰かのことを思えるその精神は尊敬に値する。

だが尊敬される人物が、いつも幸福であるとは限らない。  
どん。

と大きな音がした。

最低でも、相手はケントの後ろを走っていたはずだ。  
そのはずなのに。

「馬鹿なっ」

いつの間に追い抜かれたのか。

追跡者は彼の前に現れ、にたりと三日月のような笑みを浮かべていた。

それはおよそ知性あるもののそれとは思えぬ、残虐な魔物のような笑みであった。

「アリサッ……………！」

それが、彼が最後に発した言葉であり、それきり彼の口が開くことはもうなかった。

スラム  
貧民街。

天を突く塔が居並ぶ煌びやかな都の郊外に、寄生するように存在するその場所を、好ましく思うものは少ない。

舗装されない道は雨の日などぐずぐずとしているし、日照など考えずに乱立した粗末な建物は、街を昼間でも明るくしない。

あらゆるものが 売買され、犯罪に手を染めるものも多い。

成功者は都に、敗北者は貧民街スラムに。

それが今の世の慣わしである。

しかしその貧民街スラムの一角に、不思議な看板を出した建物が存在する。

二階建てのその古い木造住宅の玄関にかかる看板を見て、首をかしげずに済むものもまた少ない。

『万事、解決することがあります』

やる気があるのかないのか。

自信があるのかないのか。

この建物はいつの頃からか探偵社と呼ばれ、ここに住まうものは探偵と呼ばれるようになった。

早朝の探偵社。

煙突から煙が噴出していて、なんとも言えぬ良い香りがしている。

「アル、珈琲？エサム茶？」

「珈琲で」

「わかった」

ロッキングチェア  
安楽椅子に座り珈琲を注文した男は、透き通るような美しい美貌をした褐色の優男である。

やや長い耳や、女性なら飛びつかずにはおられないような圧倒的な美貌が印象的である。

彼は精霊種<sup>エルフ</sup>、それも希少な黒色精霊種<sup>ダークエルフ</sup>であり、名をアルフリート・ウルグルスと言った。

貧民街<sup>スラム</sup>では先生と呼ばれ、顔役やマフィアからも一目置かれる存在である。

何を好き好んでか、高貴な一生を約束された黒色精霊種<sup>ダークエルフ</sup>の身でありながら進んで貧民街<sup>スラム</sup>（）に住まう変り種であり、この探偵社の責任者でもある。

ちなみに普段はとても温和な性格であるが、ペトファイリア 幼児愛好家<sup>ペトファイリア</sup>ではと  
言う疑惑に対しては人が変わったように怒るから、注意が必要だ。

アルフリートは今朝届いたばかりの朝刊を広げていた。

「何かあった？」

食卓に朝食の盛られた皿を置いているのは、何とも愛らしい顔立ちの少女である。

真紅の髪は後ろで一括りにされて長く垂らされているが、大きな瞳や明るい表情から、童子の様に快活で爽快な印象を受ける。

もつともそれは、彼女の身体の起 伏が年の割にとぼしいことと無縁ではないかもしれない。

ちなみに、彼女に幼女体型などということも禁句である。

この世には、指摘しない方がよいことも存在するのだ。

「うん。まだ解決しないみたいだな。例の通り魔の事件」

「ああ」

食卓の準備を終え、アルフリートに珈琲を注いでやりながら、彼の養い子たるヒト種ヒューマンの少女、ルカは返事を返した。

「最初に霊獣種リカントの男が殺されたやつね」

「そう。昨日もあつたらしい。これで、ひー、ふー、みー…。四

人目か」

「物騒ね」

口に朝食を運びながら、ルカはアルフリートの新聞をのぞき見る。

「今度は地霊種ドワーフ」

「見境なしね」

ルカが言いながら目を丸くすると、逆にアルフリートは眉間に皺を寄せながらその目をすうつと細めた。

「…ひよつとしたら、月狂病ルナティックかもしれない」

「月狂病…？」

アルフリートは頷きながら、自身も朝食を口にする。



「さすがにまさか市街に闇の一族モンストロがいるとも考えにくいだろう？だが被害者は皆、まるで獣に襲われたかのような酷い死に様だと言う。爪とか牙の痕とかな。断定はともできないが、始めに襲われたのが霊獣種リカントの男性だったと言うのが気になる。

月狂病ルナティックというの は非常に珍しい、先天的な霊獣種リカントだけの病だ。先祖返りのような凶悪な獣の姿になり、破壊衝動のまま他者を襲うようになると言う。症 例が少ないから、まだはつきりしたことは分からないが」

「へえ。でも、そんなお化けみたいのがつろつろしてれば、すぐに見つかりそうな ものだけど」

ルカが不思議そうに首を傾げると、その愛らしい様に苦笑しながらアルフリートが言葉を続けた。

「リカント霊獣種はもともと超人的に運動能力の高い種族だが、ルナティック月狂病はそれに輪をかけて凄いらしいよ。見つけたとしても捕まえられないかもしれない」

言いながらアルフリートは茹でたジャガイモの皮をむく。

「アルなら捕まえられる？」

「ど うかな」

「私なら？」

「どうだろう？」

むう、と言ってむすつとするルカをからかうように笑うアルフリート。

「無理に関わりあうことはない。負けそうな喧嘩は買わないことだ」

カランカランカラン…。

その時、探偵社の呼び鈴が鳴る。

「はあい。誰だろ？心当たりある？」

ルカはエプロンを外しながら食卓から立ち上がる。

「さあ？頼んでた本でも届いたかな」

アルフリートの反応を確かめると、ルカは玄関の扉をガチャリと開けた。

「うん？」

最初に目に飛び込んできたのはふさふさの獣のような耳。

そして次に見えたのは美人と言って差し支えない少女の顔だった。その瞳が不安げに揺れていることも、男の庇護欲をそそるかもしれない。

そして何よりルカの視界を圧迫したのは、年頃の女性らしい豊満な姿態だった。

特によく膨らんで布地を押し上げる胸。それは道行く男性の目を引かずには置かないだろうと思えた。ルカは心の中で小さく舌打ちをする。

「わ、わたし何か気に障ることにしましたでしょうか？」

険しい表情でルカの不機嫌を察したのか。少女がおびえたようにそう言くと、後方からアルフリートがフォローの言葉をかける。

「気にしないでいい。ただのやつかみだ」  
「アル…。殴るよ」

静かに怒りを溜めるルカに、しかし少女は自信なさげに言葉を続ける。

「あの。黒色精霊種ダークエルフの探偵さんはこちらでよろしかったですか？」

「そうだよ。本人はあそこで珈琲飲んでるけど」

「おはよう」

そう言って霊獣種リカンテと思わしき少女に、部屋の奥から手を振るアルフリート。

その姿を目にして、ほうつと安堵のため息を吐きながら、少女ははつきりところ言ったのだった。

「私、アリサって言います。連続通り魔事件のことで、ご相談にあがったんですけど…」

思いつめたような少女の言葉。

ルカは怒りも忘れて、思わずアルフリートと顔を見合わせた。

## 事件1 かくれんぼ（ハイド・アンド・シーク）？

それは一週間ほど前のことであつたと言う。

黄昏時。

若い二人の霊獣種<sup>リカント</sup>はその手をしっかりと繋ぎながら名残惜しげに路地裏を歩いていった。

フリルをふんだんにあしらつた桃色のドレスを身にまとうアリスは、まるで妖精のような可憐な霊獣種<sup>リカント</sup>であり、その獣の耳を頂いた清楚な表情と、豊満で女性的な姿態のギャップに、男ならば皆くらくらしとしてしまつたろう。

彼女をエスコートするケントはがっしりとした体格の美丈夫であり、ふたりは本当に絵に描いたような似合いのカップルであるとサロンでも噂されていた。

アリスとケントはお互いの両親が認め合う恋人同士であつただと言つた。

アリスの家は資産家であり、軍人家系であるケントの家とは婚姻が成立すれば双方に色々と利点がある。

だが若い二人にとってはそんなことは考えの埒外のことであり、ただお互いを認め愛していた。

ケントは未だ学生の身であるが、内定している軍への加入手続きなどで忙しく、アリスもまたケントが落ち着けば執り行われるであろう二人の結婚式の準備に追われていて、こうして二人の時間を作ることがなかなか出来ずにいた。

いずれ結婚すれば好きなだけ一緒にいられる。

そう思いながらも、今このときの寂しさに翻弄される若さを誰

にも責めることは出来ない。時折立ち止まり互いを見詰め合うその瞳が濡れている。

しかし、その日の記憶は気恥ずかしさと共に いずれ思い返されるだろう淡い思い出とはならなかった。

決して忘れることのかなわない、血と喪失の思い出となったのである。

「覚えていない…？」

ルカにすすめられた珈琲に手をつける事もなく、アリサは一気に捲くし立てるように事の顛末を話した。

その日、二人は人通りのない路地裏で確かに何者かに襲われた。だがアリサはその時頭を打ちでもしたのか記憶がなく、翌日になってケント とは違う場所で発見されたのだ。

もちろん、そのときにはケントは無残な亡骸となって果てていた。一緒に歩いていたはずの二人の間には、かなりの距離が開いていたのである。

アルフリートが聞き返すと、アリサは申し訳なさそうに頷いた。

「警察は、気絶した私と犯人を引き離すために、ケントがかなりの距離を走って逃げたのではないかと言ってました。最期まで、私の為に…」

そこで、可憐な靈獣種リカントの娘はついに両の手で顔を覆って泣き崩れてしまった。ルカはそれを、痛々しいものを見る目で見ていないとしかできない。

彼女の養い親たる黒色精霊種<sup>ダイクエルフ</sup>は、煙管の煙草を燻らせながら、何事かを考えているようだった。

「<sup>リカント</sup>霊獣種は戦闘種族だ。ケント君は病弱だった？」

アルフリートの言葉に、アリサはがばっと顔をあげる。

「まさか！軍への内定も決まってきました。お父上に似た頑丈な<sup>リカント</sup>霊獣種でした…」

「すると、やはり…」

「<sup>ルナティック</sup>月狂病ってやつ？」

「そうかもしれない」

ルカが口を挟むとアルフリートは頷いて言った。

「それはあの、忌まわしい先祖返りの…？」

流石に<sup>リカント</sup>霊獣種のアリサはそれを知っているらしい。

獣人を恐ろしい魔獣に変える と言う悪魔のような病を思っただ、アリサがぶるりとその身を震わせた。

「<sup>リカント</sup>霊獣種。それも軍人を有望された青年を一顧だにし ない戦闘力。これは、警察の手には余るかもなあ」

「私もそう思います。でも、それじゃあケントが可愛そう。私、早く犯人を見つけてケン トの魂に安らかになって欲しいんです」

アリサの真摯な言葉を聞いて、思案気に煙を吐き出すアルフリート。

そんな己 を、期待のまなざしで見ている養い子の姿を見て、ア

ルフリートは嘆息交じりの苦笑を浮かべた。

「危なくなったら逃げる。了解できる か？」

「うん」

即答するルカに余計不安になるアルフリートであったが、彼女の意思は固そうだ。

「ふう。あなたは運がいいよ、アリサ嬢。私にはやる気になったこの子を止める術がないっていう意味でだがね」

「それでは…！」

「依頼は受けよう。ルカ。早速アリサ嬢と現場に行つてきなさい。何かわかるかもしれない。そしてその為にはできるだけ早い方がいい」

「はい」

感謝の言葉を述べるアリサに「いいよ」と手を振ってから手早く外出の準備を整えると、ルカはアリサの手を引くようにして家を出て行ったのだった。

「忙しい事だ」

言いながらアルフリートは妙にひっかかるものを感じて眉根に皺を寄せる。

ルカティック  
「月狂病…。少し調べてみるか」

そう言って、アルフリートは巨大な本棚のどこにその本をしまったかを考えて、うんざりしながら腰を上げた。

「ここが殺害現場ね」

「そう、らしいです」

太陽が正午の高さに上る頃、二人は目的の場所に辿り着いていた。新聞には詳しい場所は書かれていなかったが、都の大通りから二つほど路地に入ったこの場所で、ケントは獣のような何かに襲われた。

「リカント霊獣種の青年を苦もな く殺すほどの何か。」

現場には他の血痕は残されておらず、その何者かが無傷でケントを圧倒したと警察は見ている。

ルカは不意にしゃがみこむと、地面に耳を当てて何かを探るように目を瞑った。

「ルカさん…？」

「しっ。黙ってて…。良かった。まだ大地の記憶が残ってる」

アリサは慌ててその口をつぐんだ。

「この、エーテル霊力が異様に乱れた奴がそうね」

ルカはそう言うと地面から耳を離し、腰のポーチから何かの小瓶を取り出した。

タンクトップにぎりぎりの裾のパンツ以外には、ルカはそのポーチしか身につけていない。



都では、年頃の娘の格好とはとても思えない。

もつとも、スラムではそんな格好が当たり前だ。

普段からしつかりとドレスを着こなしているアリサがこんな格好をすれば、彼女の父親などは卒倒するであろうが。

「よいしょつと」

小瓶の中身はどうかやらかの灰のようだ。

ルカはそれをさらさらと地面に落としながら、何かの紋章のよ  
うなものを描いていく。

それは呪言<sup>ルン</sup>であった。

「【シーカーの灰】よ。我が求め　るものを手繰り給え」

すると不思議なことが起きた。

地面に落とされていた灰がふわりと風もないのに浮き上がり、は  
つきりとある方向を目指して動き出したのである。

「ルカさん。これって…」

「【シーカーの灰】。きちんとした術式をやれば目的のものを  
辿ってくれる」

「ル、ルカさん。こんな高等な術、霊術院でだって教えてないと  
思いますけど……。一体どこで？」

目を丸くするアリサにきよとんとした表情のルカ。

「どこでって、アルが教えてくれたんだ。たしか、十歳くらいの  
時かな」

「じゅッ……」

「いいから、さっさと後を追おう。こいつがどこから来たか。ま

ずはそれが掴まないと」

「は、はい」

アリサは首をぶんぶんとして左右に振って驚愕を振り払ってから、ゆっくりと浮き上がる灰のあとを追って歩き出した。

「そんな…」

小一時間後。

灰は目的を終えてルカの小瓶に収まったが、その場所はアリサがケントと共に歩いていた路地で、最後に記憶に残っていた場所であると言う。

警察は二人がここで襲われ、そしてケントがアリサを引き離すために逃げたと考えている。

アリサが別の場所で発見された理由については、意識が朦朧としていたアリサがケントを探して彷徨ったのだろうと考えていた。

「ここで、 気配が消えている？」

ルカは納得いかないというように険しい顔をしながらもう一度地面に耳を当てる。

「…だめだ。ここから先の記憶がない」

ルカは思わず小さく舌打ちをした。

実は【シーカーの灰】で犯人をたどるまではそう難しくないと考えていたのだ。

それがまさかのつけから躓くことになるとは。

「アリサさん。悪いけど今日は先に帰っててくれる？ 明日またうちに来て見て。私、他の殺害現場も全部試してみる」

「わ、わかりました」

言うが早いかルカは風のような速度で走り出してとたんに見えなくなってしまう。

「ほ、本当にあれでヒト種ヒトモウシなのかしら」

アリサは呆れたようにそう言った。

「ふむ…」

本棚の前で分厚い本を広げながら、アルフリートは月狂病ルナティックについて調べていた。

何しろその症例が恐ろしく少ない希少な病である。

地下室を半ば占拠する形で存在するアルフリートの蔵書の中にもその記述は多くはない。

その少ない記述に行き当たる頃には、すっかり夕暮れ時となっていた。

「真面目に読んだことはなかったからな。まさか、自分が関わることになるとは思わなかったし」

そついいながらもぺらぺらとページを手繰る、アルフリートは、とあるページの記述でびたりと手を止めた。

「これは…？そうか！しまった。私達はとんでもない思い違いをしていた ようだ」

なにごとかに気付いたアルフリートは、そのまま本を取り落とし  
てしまう。

開かれたままの本のページにはこう 記されていた。

『ルナティック…月狂病とは月の病である。月と共に靈獣の姿は闇の一族  
(モンスター)のように変貌し血肉 求める。だが、彼にその覚え  
はない』

「まるでかくれんぼ(ハイド・アンド・シーク)ね」

丸い一日を掛けて何の成果も上げられず、ルカは地面にへたり  
こんだ。

他の3つの殺害現場にも同じように「シーカーの灰」を使ったも  
の、この3現場から立ち昇った灰はいずれもある屋敷の裏路地  
まで漂ってきて、そこで消えてしまうのである。

すでに夕刻も終わろうとする 黄昏時。

ルカは成果の上がない結果に嘆息しながらも、夕食の支度をし  
よう一旦家に帰ろうとしてそして。

不意にその ことに思い至った。

「どうして、奴の気配はいつも、消えたり、現れたりするんだろ

う

それは、まるでかくれんぼのように。  
現れたり消えてしまったり。

消えている間、犯人は一体どこにいるのか。

「……まさか。ルナティック月狂病っていうのは……」

「ルカさん」

突然掛けられた声に、ルカはびくりと震える。

「アリサ…さん。どうしてここに？こんな時間に？」

そこにいたのはアリサだった。

昼間別れたばかりの彼女そのままである。

アリサはにつこりと、それこそ男なら誰でも絆されそうな笑みを  
浮かべてから、なんでもないことのように言った。

「この裏。うちの屋敷ですから」

「…へえ」

言いながら、ルカは夜空を見上げた。

月が。

見下ろすように天に掛かっている。

「ルカさん。私、記憶が戻ったんです。全部分かりました。犯人  
も、全部。ご苦労をかけてすみませんでした」

「…それは良かった。じゃあさ、もう、帰っていいかな」

からかうような、何かを諦めたようなルカの口調に、アリサは

にたりと、ぞつとするような笑みを浮かべながら首を横に振る。

「…いいえ。お礼にルカさんには教えて差し上げようと思って」

ざわざわざわと、アリサを中心に黒い気配が広がる。

温和な気配はもう微塵も存在しない。

「危なくなったら逃げるって、約束したんだけどなあ」

ルカはそう言いながら、無意識のうちに腰のポーチに手を掛けていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3390z/>

---

黒色精霊種(ダークエルフ)さんちの女の子

2011年12月11日23時52分発行